

総合討論 1

モデレーター
獨協大学国際教養学部准教授
小宮 秀陵 (「ミヤ・ヒデタカ」)



小宮：一日目の講演および報告をしていただいた先生方に参加いただき、会場からいただいた質問をもとに議論を行なっていきたいと思います。まず、朴芝賢先生の発表に対して、以前にあった移住に対してディアスポラと説明できるのか。また遺民ごとに経験や記憶が異なるのではないかという質問がありました。これについてどう思われますか。

朴(芝)：ディアスポラ概念が拡大しすぎると、本来の意味が消失する可能性があります。一つの事件、いわゆるトラウマを契機とした分散がディアスポラの本質であるため、移住全般に適用するのは難しいと考えます。日本に移住した百済遺民の背景についても資料が存在しないわけではありませんが、ディアスポラとするには課題が多いと感じます。

記憶や経験は、基準を置いて考えるかということによって変わってくると思われますが、基本的には個々の背景に深く

根差しており、遺民ごとに異なる記憶や経験を相対的に統一するの現実的ではないでしょう。

ただし、日本の百済遺民は遺物などに百済的な要素を見出せるため、特定の文脈でディアスポラを議論できる可能性があります。また、唐では、税金免除に象徴される法的特例が重要な役割を果たしました。これを通じて移住や社会構造の背景を探ることができると考えます。

小宮：ありがとうございます。つづいて、朴俊炯先生からもコメントをいただきたいと思います。在朝日本人の第一世代はどのように移住したのか。また在朝日本人の集団的アイデンティティとしてどのような特徴がありますか。

朴(俊)：在朝日本人一世の移住をパターン化して申し上げるには難しいかもしれませんが、明治期、日本人は朝鮮に移住し、最初は租界で分居していましたが、次第に雑居化が進みましました。その後、日露戦争を経て、日本人街と朝鮮人街に分化する動きも見られます。どういった場合に分居から雑居に変わり、雑居から分居が変わっていくのか、その背景を研究する必要があります。

また、在朝日本人のアイデンティティについてもケースごとに異なりますので一言で申し上げることは難しいですが、例えば、一九六五年の国交正常化とともに、在朝日本人たちが

故郷を見に日本を訪れることが多くありました。その際に本土の日本人から異なる扱いを受け、アイデンティティに壁を感じることがあったといえます。また、故郷の風景に感動しつつも、何かしらの違和感を覚え、自らの居場所を見出せない。自分のアイデンティティというものを見つけることができない。そんな状態になってしまいうこともあったようです。このような混雑性は、在朝日本人の特徴といえるのではないのでしょうか。

小宮：さらに、韓鈴和先生がコメントにて指摘された、民族間あるいは集団間、個人間の「境界を崩す方法」について、どのようなお考えをお持ちですか？

朴(俊)：境界を崩すためには、異なる文化や背景を持つ人々が共に集い、意見を交換し合う機会を増やすことが非常に重要です。このフォーラムのような場は、素晴らしい機会ですね。異なる民族や文化間の交流が促進されることで、私たちはしばしば自分自身の中にある先入観を認識することができまします。この認識は、時には自分の思考をより柔軟にし、他者への理解に繋がります。互いに相手の文化や考え方を深く理解しようとする姿勢が境界を崩す第一歩となるのではないのでしょうか。私は最近カナダに滞在し、互いを尊重する人間関係のあり方に感激しました。このような、尊重を出発点とした交流を重ねることで、境界を越えていくのではないかと考えます。

小宮：境界を崩すためには、「記憶の捉え方」が重要なポイントだと考えます。これに関連して、李炳鎬先生にご意見を伺いたいと思います。

李(炳)：韓国の学会は、専門分野ごとに集まる傾向が強いという点特徴です。今回のように、異なる専門分野の人々が一堂に会することの重要性を改めて感じました。本フォーラムの前半である「移動と記憶」に関連する議論では、古代史における楽浪問題が重要です。韓国の教科書では楽浪の滅亡のみが言及される傾向があるものの、最近では楽浪滅亡後の流民の動向に関して、高句麗史、古朝鮮、秦漢史、考古学など多様な分野の研究者が集まり、議論を深めています。楽浪の問題は日本学会だけでなく、西洋やヨーロッパの研究者も含めて韓国学として議論されるべきだと感じました。このように視野を広げること、韓国古代史がさらに発展する可能性があると考えます。

小宮：最後に、鄭杓根先生にもコメントをいただきたいと思っています。

鄭：朴芝賢先生から指摘された「混種」の問題は非常に重要であると感じました。個人と個人、集団と集団、あるいは国家間の対立ではなく、むしろ混種的な存在として新たな視点を持つことが重要だと思います。近年、韓国の学会でも、各分野が孤立するのではなく、融合していくべきだという考え方が主流となりつつあります。日本でも同様の流れがあると思います。このように、異なる分野や視点が融合し混ざり合うことで、最終的には統一的な「混種的存在」が形成されるということが重要だと考えます。

小宮：以上で総合討論を終了いたします。ありがとうございます。